



新しい時代の 幕開けに思うこと

● NPO法人ホップ
障害者地域生活支援センター

代表理事 竹田 保

今年、新天皇即位による新たな年の幕開けが始まる。私自身、昭和、平成、新元号と三代に渡って生きることに成るとは思いもよらなかった。生後間もなく病気を発症した関係で、高校卒業までの大半、自宅を離れ病院で過ごした。当時の病院は療養入所施設も兼ねていたが、戦前からの陸軍病院を引き継いでいた使用していたためかなり老朽化していた。半世紀近く前の事になるが、当時の病院での暮らしは、窓から隙間風と一緒に雪が舞う中、車いすの後ろに自動車のタイヤを縛り付けて廊下を何回か往復したり、全身を補装具で固定し仁王立ちになった状態で後ろから押されて、転んでも怪我をしない練習を繰り返していた。リハビリの考え方が、障害を克服して健常になることを目的としていたので、致し方ない面があったと思うが、私にとっては、漫画に出てくるタイガーマスクの虎の穴の特訓を受けているようで、リハビリを受けることは苦痛でしかなかった。

小学校高学年の時に、縁あってテレビの取材を受けたことがある。放送中にドクターが筋ジストロフィー症という病気について説明していた。ドクターの説明では、徐々に力が弱くなり、やがて動けなくなってベッドから起き上がれなくなる。二十歳まで生きるのは難しいとも言っていた。自分の病気や障害が将来どの様になって行くのかをこの時に初めてを知った。子供だったということもあったと思うが、不思議と二十歳までの人生と言われても、まだまだ先のことで悲しみや恐れを感じる事もなくやり過ごしていた。

ただ、二十歳までのカウントダウン。いかにリハビリを上手にさぼり楽しく過ごすか、何としてでも、病院入を抜け出して見せる、という目標を見出すことが

できた。この時から、集団行動に馴染めないという性格が出来上がったと思う。また、当時、入院していた病院は自衛隊基地に隣接しナイキミサイル配備問題で喧々囂々としていた。そんな中、「長沼ナイキ訴訟」判決を聞かされたことで、判決文を書いた福島判事が上司や権力に忤度せず、良心に従い法と正義に従ったと聞き、強い憧れを抱き、いつの日か、同じ職場で働ければというとんでもない妄想を抱くようになった。やがて、家族の理解もあって、数年後に病院の反対を押し切って退院することができた。

高校卒業後は、就職浪人、施設入所、アルバイト、居候、といった生活を経た後に就職をする事が出来た。アルバイト時代は経済的にも厳しく、生活面での福祉サービスも乏しく、食べること、トイレに行くこと、夜寝ることなど基本的な生活を維持することも難しい、ギリギリの厳しい日々を過ごしていた。それでも、最後の最後は強制的に措置を受けて入所施設に戻されるまではジタバタしながらでも地域で生活することを選択した。今の生活もある意味では延長線上ともいえる。

昭和、平成時代を経て、障害があっても地域の中で生きて行くためのサービス基盤が築かれ、ステップアップとして、サービスの受け手から担い手となることも可能となった。多くの障害者が欧米福祉に触れ、ノーマライゼーション、自立生活運動に刺激を受け、権利主張に目覚め、自分らしさを主張する変化に富んだ時代になったと思う。

阪神淡路大震災、東日本大震災、ブラックアウトを経験し、災害弱者といった緊急時おいての障害者や高齢者への配慮への理解も進んできただけでなく、気管切開による痰吸引や人工呼吸器を使用している医療的ケアを必要としている障害者への支援策についての支援と理解も進んだ。

次の時代には、障害者が普通に暮らすことが当たり前になり、生きることが楽しいと心から感じるようになることを期待している。そのためにも、思いを伝えていかなければならない。今年、国政選挙と統一地方選挙が実施される。未来を切り開くためにも伝えていかなければならない。